【完】ダンス・イン・ザ・マフィア　９

【完】ダンス・イン・ザ・マフィア　9

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19218462

モ腐サイコ100, 霊幻総受け

誰得？俺得！なマフィアパロです。師匠総受けです。暴力描写や殺人描写を含みます。今回にておしまいとなります。これまでお付き合いくださりありがとうございました。倫理がアレ。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

【完】ダンス・イン・ザ・マフィア　9

こんな──
こんな規格外（バケモノ）、金欠だってぼやきながらマフィアの世界で踊って遊んでいるだけだった。
それを今、彼らは目覚めさせてしまった。
「お前らバリアの最大出力で霊幻を抑え込め！行動させるな！！」
エクボの叫びに、芹沢、茂夫、輝気の超能力者組がばっと手を広げて力を放出する。
「がはっ」
壁から跳躍しようとしていた霊幻を壁に縫い付けた。
「よし、そのまま──！」
エクボが余っていた麻酔弾入りのマカロフを構える。

ビキ……

バリアにヒビが入って、霊幻以外の全員息を呑んだ。
「これ以上出力を上げて押さえ付けると、人体を潰してしまいます！」
芹沢が叫ぶ。
「信じられない……なんで動けるんだ……！」
「人体の違法改造だ。関節に油圧装置入れられて、通常の筋力の数十倍の力が出るようにされてる」
輝気の言葉にエクボが応える。
「……成長期の子供の身体でないと拒否反応を起こすから、世界中で禁止されてる手術だ」

パキィィィン……！

霊幻が両手をクロスさせると、バリアは薄い飴の層の様にバリバリと砕け散った。

「なあ、おれ、あいすくりーむ屋になりたかったんだ」

とん、とベッドに舞い降りた霊幻が、ふわり、とスーツの上着をゆらめかせながらくるりと一周その場で回る。

ピン、ぴん、こぉん、と、ピンの抜けた手榴弾がピニャータのキャンディのように霊幻の上着から溢れるように落ちて、エクボや芹沢たちの方に転がっていく。
「バリア全力ー！！」
そう叫びながらエクボ自身は転がって来た手榴弾を拾って窓に向かって投げる。
（４、５、まだ爆発しないはず）
そしてその場に伏せて目を閉じ耳を塞いで口を開けた。
芹沢達もソレに倣う。
バリアに封じ込められた手榴弾が甲高い音と閃光をもたらす。
「よし耐えた、立て！」
エクボが全体に指示をする。
「あいつは暗器使いだ！！服を脱がせろ、武器を奪え！！」
「へえ」
すうっと酔った霊幻の目が細められる。
「おれをぬがせたいの？いいよ」
霊幻自ら高級スーツを脱ぎ捨てていく。
「──むだだけど」
下着を脱ぎ捨てた裸の霊幻がうっそりと笑いながら、右腕を振ると。
手首から鋭いナイフが生えた。
「体内暗器……！」
うめくようにエクボがソレを見て言う。
「それに、この屋敷はおれの要塞だぜ？」
ナイフを腕の中にしまい、壁の隠し扉から霊幻は自動小銃を取り出す。
「あはっ」
「バリア展開──！」

パラタタタタと軽い銃声が響く。
エクボはテーブルの下に滑り込みながら、超能力者組に指示を飛ばした。
「しぶといな」
ぐいと霊幻はカーテンのタッセルを引く。
天井の四隅から機銃が降りてきた。
「コッ、コンシリエーレ！！どうしたら！！」
「ばっかそんなの決まってるだろ！！」
エクボは必死に叫ぶ。
「バリア張りながら命乞いしろ、情に訴えろ！霊幻ならそれが効くはずだ！！」
「そんなぁ」
情け無く芹沢がつぶやく。
「あ、アイスクリーム屋なんて今からでも成ればいいじゃねーか！！」
銃弾をテーブルで受けながらエクボが叫ぶ。
「あいすくりーむ食い放題だと思ったんだよな、あいすくりーむ屋になれば」
ピタ、と銃弾が止まる。
「大学にも行ってみたかったし、会社にも勤めてみたかった。でも……」
霊幻はエクボが隠れていたテーブルを蹴り上げる。
「全部選べなくされた！！俺は『ミエーレ・ヴィリーノ』のまがいものとしてしか生きていけなくされたんだ！！」
全身の刃を出してエクボに切り掛かる。
エクボはそれを居合で弾いた。
「……っ、いつまで前の男のピロートークを引き摺るつもりだよ、霊幻！」
「……あ？」
ぴくりと霊幻のほほが引き攣る。
「お前はもうミエーレのオモチャじゃない、霊幻新隆だ、俺たちのドン・アラタカだ！！」
「そうですよ、師匠！！」

横から当てられた念動力に霊幻は羽衣のようにふわりと飛んで威力を消す。
「僕たちを助けてくれたのはミエーレじゃなかった！！あなただったんです、子供に弱い、甘っちょろい、『霊幻新隆』だったんです！！」
茂夫は必死に霊幻に叫ぶ。
「あなたは成れている！マフィアの世界ではあり得ないほどの『いい人』に！！ショウくんを好き勝手助けられたあなたは決して、ミエーレのまがいものなんかじゃない！！」
ふ、と霊幻の動きが止まる。
「モブ……」
「師匠、もう、僕たちからしたら、師匠の過去なんてただの御伽話ですよ。話してくれてありがとうございました。面白かったですよ。それでおしまい、です」
「おとぎばなし、かぁ……」
ふ、と霊幻が天井を仰いだ瞬間に。
「ォラアアアアア！！」
エクボがワインの瓶を霊幻の頭で割った。
「ふぁ……」
濃いアルコールの匂いに霊幻の目が回ってへたりこむ。
「とどめだ」
エクボはグラスのワインを霊幻の口に流し込む。
「んぅ……っ」
口の端からこぼしながらもそれを飲み込んだ霊幻は、完全に目を回して気絶した。
「え、えらい目にあった……」
全員が肩で息をしている。
「これ、ロマネの５０年ものだぞ、ちくしょう」
霊幻の頭にご馳走した祝い用のワインにエクボは悔しそうにうめいた。

※

「ん……」
目を覚ますと縄でグルグル巻きだった霊幻は、指からナイフを出して縄をズバっと切る。
「この感じは、俺にアルコール飲ませたな？」
「そーだよ」
ソファーで芹沢と茂夫、輝気が重なって寝ている中、唯一起きて壁にもたれかかっているエクボが応える。
「よく生きてたな、お前ら」
「おかげさまで」
エクボが吐き捨てる。
「アルコール飲むと大抵一緒に飲んでた奴を殺してるから、避けてたんだが、お前俺に盛ったな？」
はははと笑う霊幻にエクボは頭を抱える。
「やるんじゃなかったと思ったよ。でも……知れてよかった」
「……」
じっと疑いの目で霊幻はエクボを見る。
「忘れてくれるなよ、俺が惚れたのはミエーレの手下だったお前じゃねぇ。子供を守るためにブラッド・バスを作ってたお前だ。……ここにいるみんなそうだよ。シゲオの言う通り、お前の過去なんかタダのお伽話だ」
くっくっと布団を引き寄せて霊幻は笑う。
「……そっか。……そうだな。……それでいい」
その瞳はひだまりの色をしていて。
「ああ。お前は何にでもなれるんだぜ、霊幻」
そのエクボの優しい嘘に、美しく霊幻新隆は微笑った。

※

「つーわけだから、ウチのドンはもう暗殺はしねぇんだよ。悪いな」
路地裏でシチリアからのお客を相手しながらエクボが言う。
「分かってるのか！？あの『ミエーレ・ヴィリーノ』の最高傑作ともなれば、シチリアマフィアに売れば１０億……いや、１００億は

くだらないんだぞ！！『悪霊』のアンタとコンビとまでなれば、巨万の富が手に入る……！」
うーん、と日本刀の背を肩にトントンと当てながら困ったようにエクボはうなる。
「興味ねぇんだわ、金とか名声とか。それより俺はドンの唇の方が、よっぽどそそるんでな」
路地裏のチンピラに吐き捨てる。
「それよりお前、ウチのドンの過去を知っちまったな？じゃあ悪いが、生かして返せねぇなぁ」
チャキ、とエクボはマカロフを構える。
「なにせあいつの過去はおとぎ話らしいからな。だから最後はこう締めなくちゃ。

そしてみんないつまでも幸せに暮らしましたとさ。めでたし、めでたし」

――――――――ＢＡＮＧ

完